

# 若手技術者の人材育成について

小摺戸地区及び音沢地区堤防強化他工事

大高建設株式会社

現場代理人 杉原 剛二

○ 監理技術者 石井 利和

## 1. はじめに

事業の概要及び整備効果

平成27年9月 関東・東北豪雨を契機に示された『水防災意識社会 再構築ビジョン』より、越水のリスクが高い箇所においてねばり強い堤防構造の取り組みが全国的に行われている。

この取り組みを受け、

1) 入善町小摺戸地区……………CCTV設置による空間監視機能強化

2) 黒部市宇奈月町音沢地区……………堤防の補強

3) 入善町小摺戸地区・黒部市荒俣地区…堤防道路の天端舗装

上記の施工により堤防機能を強化し、また背後地の家屋連帯部等を守る効果を期待した工事である。

## 2. 工事概要

1) 工 期 平成28年 7月16日～平成29年 1月31日

2) 工事内容 電線管配管工、路体盛土工、吹付法砕工、野芝付ジオテキスタイル工、アスファルト舗装工他

## 3. 当工事の特徴と現場条件

### 1) 広範囲な施工範囲

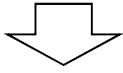
工区は大きく分けて3箇所になっており、河口付近から音沢地区まで16kmと広い範囲が設定されている。



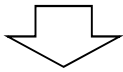
## 2) 多様な工種

### 【小摺戸地区】

路体盛土  
2700m<sup>3</sup>



電線管配管工  
2,500m

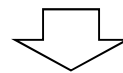


AS舗装  
2950m<sup>2</sup>

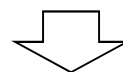


### 【音沢地区】

石積補修工  
(DKボンド)  
1,893.20



吹付法砕工  
182.7m



野芝付  
ジオテキスタイル工  
127m<sup>2</sup>



### 【荒俣地区】

AS舗装  
1680m<sup>2</sup>



## 3) 現場条件と特徴からの問題点

- ①現場代理人と監理技術者では広範囲の現場を管理できない。
- ②多様な工種があり、それぞれに担当技術者が必要である。

## 3. 問題点への取り組みについて

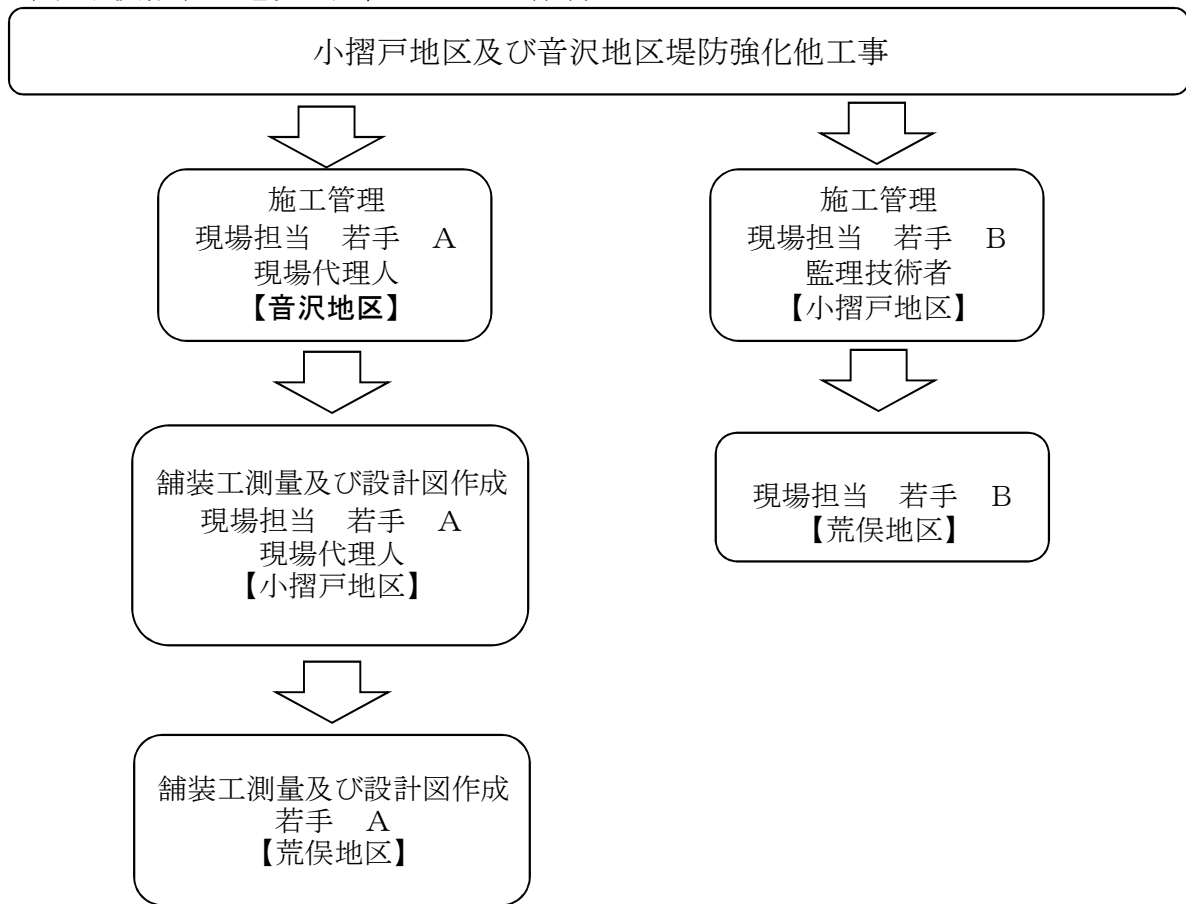
本工事を施工管理するためには、多数の土木技術者が必要であることから若手技術者の施工管理能力技術の向上が必要であった。

さらに、昨今の建設業にとって、次世代を担う人材育成が極めて重要であり、若手技術者が土木工事に誇りとやりがいをもって仕事に打ち込める環境を整備する必要があると考えた。

そのため本工事で行った若手人材育成のための創意工夫と店社で行っている取り組みについて報告する。

#### 4. 本工事での実施内容

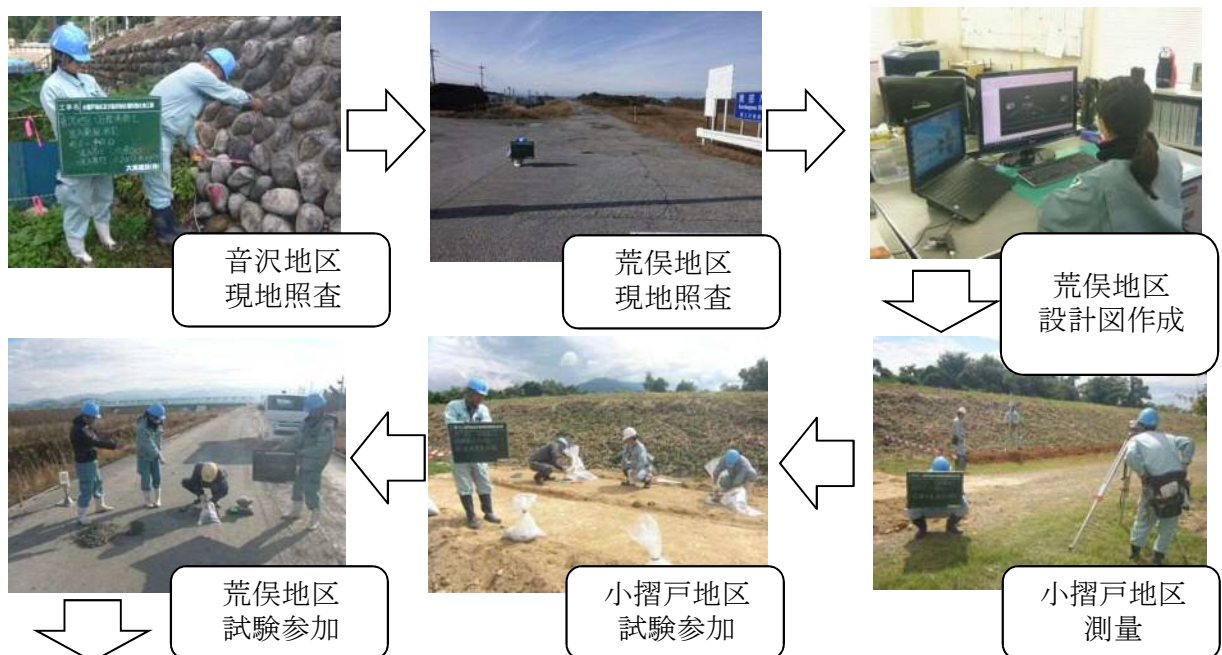
##### 1) 若手技術者の適切な配置とサポート体制について



現場代理人と監理技術者が若手技術者をサポートし、技術力の向上を促した。さらに、過度な責任を押し付けないよう注意する。

その経験を活かし荒俣地区では、若手技術者A・Bそれぞれが、現場管理と設計図作成に責任を持って従事させた。

##### 2) 担当業務について





音沢地区  
出来形測定



音沢地区  
現場代理人  
による確認



小摺戸地区  
現場代理人  
による確認

各地区において、主要工種には必ず若手技術者が担当し、現場代理人及び監理技術者がその結果を確認した。

また、照査→計画(設計図作成)→施工(測量・試験参加)→結果(出来形測定)の一連の流れを経験させた。

## 5. 人材育成に対する店社としての取り組みについて



若手技術者による  
安全パトロールの参加  
安全コンサルタントと  
安全部長による指導



安全パトロールには、  
安全部長から直接指導



若手技術者への  
現場技術説明会の実施



安全衛生委員会での  
若手技術者による報告・発表

一つの現場での作業や知識を向上させることだけでなく、幅広い状況把握ができる人材育成を目指し取り組んでいる。

## 6. 結果と今後について

各地区において、主要工種に必ず若手技術者を担当させ、現場代理人及び監理技術者が確認した結果、ミスなく工事を完成させることが出来、施工管理技術の向上につながった。

さらに、本工事と店社での取り組みを通じて、今後の工事につなげてほしいと考えている。

また、工期末に施工した荒俣地区においては、一連の流れを経験させたことにより一人で現場管理することが出来た。

今後、土木工事は国土の強靱化、防災、減災の取り組みとして非常に重要であり、設計・施工・材料・維持管理すべてを満足することで長年に性能を発揮することが出来る。

そのことを業務中だけではなく、いろいろなコミュニケーションの場で教育していきたいと考えている。

若手技術者の人材育成に努める中、自分自身の技術向上も必要であることを考えさせられ、今後我々も自己研鑽に努めたい。